

# 教 仏 庵 草

第243号  
(発行日)

2010年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《聞法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 死後の浄土を信ず

「浄土の教え」といえば必ず死後に浄土に生まれるとか、地獄に墮ちるとかの話が出てくる。そうすると現代の私たちは、とても行って行けぬと尻込みをするか、教えを軽んじて真剣に耳をかたむけなくなる。死後の極楽や地獄の話は現代人にとって浄土の教えに入るへつまずきの石となる。

それゆえ中にはこうした現代人の思考状況に合わせて、死後の浄土往生を否定的に語る真宗人も出てくるが、死後の浄土往生を否定しては真宗の有難さは半減してしまうように私には思われる。

ただ実際、「死後に浄土に生まれる」とか「地獄に墮ちる」というような話は、私自身、若い頃は到底信ぜられず、それは作り話であろうと思っていた。縁あって仏教を学ぶようになった。死後は問題にならないばかりか、死後に極楽浄土に生まれるとか地獄

に墮ちるとかの話はなかなか信じられず、また関心も乏しかったように思う。それよりも、現在の私の心の状態をなんとかしたいという、現在ばかりが問題であった。「この暗くて苦しくてうっとうしい心をなんとかしたい」というのがもつぱらの関心で、ご信心をいただければこうした心の問題が解決するだろうと期待して真宗の話聞き、念仏し続けていった。

ところが何年たっても信心はいただけず、明るくもならずうっとうしさも去らず、とことん私の心に困りはてたとき、はからずも「そんなお前だから(私が引き受ける)」との南無阿弥陀仏の言葉に驚き、この言葉にこもる仏の大悲心が不思議にも私の心に流れ込んだのである。私の心に一条の光が入って下さって、人生の根本的気分としての闇が去ったのである。

その時に、身に浸みて感じたのは「仏のお言葉は真実だ」

との実感であった。それ以後、仏の言葉を尊重するようになった。

そして阿弥陀仏のご本願である「欲生我国(我が浄土に生まれるとおもえ)」との言葉を聞いても、その仰せに間違いはないとなって、「ああ、私を浄土に生まれさせて下さることよ」と受けとることができるようになった。ほのかであつても、浄土が信ぜられ、ほのかながらも死後に浄土に生まれさせていただけること

がほんまになってきたのである。今までは、何か空想的な話のようにしか受けとっていなかった浄土往生ということが、やつと本当になりはじめたのである。

このことは私にとって小さな事ではなく、非常に大きな事であった。「生まれて死ぬ」としか考えておらず、死ぬことをいやがっていた私にとつ

て、死は「浄土に生まれる」ご縁であるという意味に変わり、死を超える道が与えられたのである。そしてこのことは人生全体を照らす恵みとなったのである。

そういう意味で、私のように死後の浄土が信ぜられず、浄土を受けられる心がなくて、現在におけるさまざまなかたむけ、やがて仏の大悲心にあうことになり、仏心大悲によつて仏語に対する信頼が生まれる。そうすると「我が浄土に生まれさせる」という仏のみ言葉がまことと受け入れられるようになり、浄土に生まれるということも浄土に生まれるということも浄土に生まれることと感ずるようになってくるのである。

仏の大悲のまことにふれるなら、仏の言葉を素直に聞く

《真宗入門講座》

(お勤めのおけいこと法話)

毎月十八日(午後六時半始)

担当(副住職) 土井尚存

\*勤行の練習と真宗の教えを基礎から学びます。どなたでも自由にご参加ください。

耳が与えられ、死後の浄土往生も受けいれられるようになってくる。だからどこからなりとも仏の大悲のお心に触れることが肝要である。

なお仏の言葉に対する信頼が起ることの裏には、聞法によつて、自分の考えが如何にも頼りにならず、また自分は愚かな人間であるというのと、いわば人間の知性の限界が知らされるということがある。

実際、私たちは沢山の事を知っているようであるが、私とは何か、その真相はほとんど分かっていない。またこの世界のこと、目の前の草木から天体など、さまざまなもの

は実際不思議だらけであつて、その真相は私にはほとんど分からない。

なかんづく「私はどこからこの世に来て、私は何であり、わたしはどこへいくのか」という根本の事については何も知らない。そんな私が、世界の真相、生死の本質をさとした仏の言葉に対して、「それは本当かどうか」「ウソかまことか」と判断し、私が納得できたら受けいれようなどと傲慢にも思っていたのであ

る。

私の考えは身近な生活の上ではある程度有用であつても、人生の一番大事な問題にたいしては全く無知である。そのような、真つ暗な海に投げ出されて漂つている無知な私に、「汝を引き受ける、浄土に連れて行く」との大悲

ましますと知らされ、ああ有難いとふつと大悲に引きつけられた時、はからずも大悲の心が入つて下さつたのである。大悲の心が私の心に離れなくなり、仏の光が暗闇の人生を照らして下さるようになった。こうして仏の言葉は実に不思議であり、真実であるという実感がそこから生まれてきたのである。

現代人には死後の浄土往生はなかなか信じ難いであろう。しかし、死後に浄土に生まれるとか、地獄に墮ちるとかいうことが信じられないまま、今の自分の苦しみを縁として仏法を聞き、お念仏を申していくと、仏のお心のまこととにふれ、死後の浄土往生の話も自然に信じられるようになってくるであろう。(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (三十一)

能発一念喜愛心

不断煩惱得涅槃

凡聖逆謗齊回入

如衆水入海一味

得る

と云われるのです」

G 「能く」という字は何を表しているのですか」

D 「ここでの能の字の意味は

「強い力を持つてはたらく意」であり、阿弥陀仏の大きいなる働きによつて、私の心に信心

がおこるという意味を表すために「能く」という字をつかわれたのではないでしょう

か。本願を信じる信心は私の力や私の心からおこるのではなくて、阿弥陀仏の大慈悲心の力が私の心に働きかけ、私の心に届いて、私の信心とな

つてくださるのです」

G 「そうすると、信心が発起するのは私の手柄ではなくて阿弥陀仏の大悲の願力のはたらきによつておこるのですね」

D 「ええそうです。阿弥陀仏から回向(能回向)されて私の心においてはからずも成就して下さる信心であるとい

う、そういう阿弥陀仏の能動的な働きによつて発起する信

心であることを「能」という字で表されたのではないでしょう

G 「では「一念喜愛心」とは」

D 「喜愛心とは喜び愛でる心のことで信心のすがたです。本願に助けられたことを喜び愛好する心のことです。本願に助けられて正定聚の位に入

れていること

G 「「一念」とは」

D 「一念についてはいろいろいわれています。まず時の極まりといわれ、一瞬という意味があります。それは永遠の真実(阿弥陀仏の本願力)

が全人生の時間の中に入った出来事の時をいうのです。それはご本願の思し召しを聞く一瞬にこの出来事が成立するのです。それには手間ひまがかからない。阿弥陀仏のお助けは即座にいただけるものであつて、人間の側に準備も用意も時間もいらぬ。汝を

引き受ける」の阿弥陀の仰せを聞く、即座に私の心に阿弥陀仏のまことが接触したものであり、一度あえばもはやそれは流れ去らず、私に常に

とどまりたもうのです。ですから、南無阿弥陀仏は臨終直

ば、煩惱を断ぜずして涅槃を

\* 能く

D 「ここからは本願を信ずる信心をいただいた人に与えられる功德利益を示されたところ

です。まず

前でも聞く一念にお助けにあうことができるように仕上がつている有難い法なのです」

G 「本願を聞く、その時に即座に救いが成就するようにできているのですね」

D 「ええそうです。それは、本願の仰せを聞いて、その仰せが他ならぬ助からぬ私の為であったと、(我がため)と真受けに聞いていることなのです。(そのままなりを助ける)と喚ばれて、それが助かる種の一つもないからつぼの私目当ての大悲であると聞き受けられているのです」

G 「今口に出て下さるお念仏が(汝をそのままなりで助ける)と喚びづめに喚んで下さる。それがこんな私のためであつたかと聞き受けていることなのですね。しかし、極めて単純なことでありながら、なかなか私に通らないですね」

D 「ええそうなんです。それは邪見慢(きょうまん)のゆえです。また一念には(ふたごころのない)という意味もあります。信心には本願の思し召しにたいしてふたごころなく聞いている心が信心だからです。本願の仰せを仰せのままに聞いているのが信心の姿です。阿

弥陀仏が(汝を助ける)と仰せられておられるのをその通りに(汝を助ける)と聞いているほかにはないのです。弥陀の仰せに対して、(あああでもあろう)(こうではなからうか)と自分の思惑(おもわく)や考えをさしはさんでいないのです。幼い子供がお母さんの言うことをその通りに聞いているようなものです。(汝を浄土に連れて行く)との仰せを聞いて、連れて行って下さることよといただくばかりです。(そういわれるけど本当だろうか)(本当に浄土にいけるかどうか)あやしいものだ)などという私の側の思いをさしはさまない。たとえそういう思いが起こつても、それを無駄(むだ)な計らいとしてかえりみないのです。それがご本願にふたごころのない一念の信心というのです」

G 「次の煩惱を断ぜずして涅槃を得るとは」

D 「これについては宗祖が不断煩惱得涅槃というは、不断煩惱は、煩惱をたちすてずしてという。得涅槃ともうすは、無上大涅槃をさとするをうるとしるべし」

と仰せられています。信心をいただく煩惱がなくならないままでこの上ない涅槃を得る身に定まると知りなさい、と仰せ下さっているのです。信心をいただく、この世に

G 「涅槃を得るのはこの世ではなくて、この世を終えて浄土に生まれる時なのです」

D 「ええそうです。涅槃を得ることが、この世において定まるのです」

G 「なぜ信心をいただくと定まるのでしょうか」

D 「それについて宗祖は

ち内因とす。光明名(みょうめい)の父母、これすなわち外縁(げえん)とす。内外の因縁和合して、報土の真身を得証す。

といわれています。ここで(報土の真身を得証す)とは、浄土に生まれて仏身になることと、無上涅槃を得ることと同じです。さてここで、弥陀

の光明と名号は私の外から働きかけ、内心には真実信の業識が因となって涅槃を得るといわれているのです。この真実信の業識すなわち信心の業識が因となるといわれていることが大事です」

G 「信心の業識とはどういうことですか」

D 「業識とは仏教でいう自己の主体のことです。業(ごう)は行い、識(しき)はその行いの本になっている心のことです。行いの本である心が私という存在の主(あるじ)ですから、いろいろな行為、いわゆる聞く、感じる、知る、などの行為(業)を行う主体の心のことを業識といえます。ですから私という存在の主体が業識なのです」

G 「では信心の業識とは」

D 「ご信心を頂いて、業識に離れない信心ということでしょう。それは主体の心に信心がそとからつけ加わるといふよりも、真の主体となつて下さった信心といえましょう。今まで自我が認識主体である心の主人公であつたのが、心が心の真の主体にまでなつてくださったのを信心の業識といわれるのでしよう」

G 「そうすると、今まで自我が主体であつたのが、信心が心の真の主体になるといふ轉換が起こつた。それが信心をいただいたということですね」

D 「ええ、私はそういただきたいです。宗祖が真心徹(てつ)する人はの徹到(てつたう)という意味を(とほりいたる。髓(すい)に到り徹(とほ)る)と左訓されています。この意味は真心(信心)が私のいのちの髓すなわち心の中心部にまで到り届くということでしょう。そのように認識主体(業識)の中心部に届いて下さる信心ゆえ、それを内なる因とし、光明と名号の働きを外なる縁として、浄土に導かれ、大涅槃の覚(さつ)りをひらくといわれるのでありましょう」

G 「信心が私に定まる時が、涅槃を得る因をいただいた時なのですね」

D 「ええそうです。真実の主体である信心だからこそ、正しく浄土に生まれたいなる涅槃を得る因となつて下さるのでありましょう」

# 信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十七

太字が松並松五郎師の言葉。

○人と生まれた嬉しきは  
末代なれどみ仏の  
教えを受けてこの度は  
迷いはなれる時は今  
この度つとめずふる里に  
帰らば実に受け難き  
人と生まれし尊さも  
すべて空しくなりぬべし  
無常の悲しみ目の前に  
誰かのがれる術あらん  
人皆心に心して  
常に教えを求むべし  
教えは広くかずありて  
いずれも釈迦の説なれば  
仰せのごとくにしがえは  
共に生死をはなるべし  
あわれなるかなお互いは  
修行の足腰立たぬ身で  
導きたもうはけ高くも  
身には一つも添い難し  
ここに念仏往生の  
一門こそは我々を  
易くうまれん因にとて  
南無阿弥陀仏に成りたもう  
この源は法蔵の  
やむにやまれぬ強縁に

我が魂いだいて今ここに  
南無阿弥陀仏と湧き上がる  
声に姿も名もこめて

心を照らす慈悲の御手

恵みの親か喚ぶ声か

求められたる目無鳥

元の心をそのままに

いらわず口に南無阿弥陀仏

けがれたこの口清めずに

声にい出して南無阿弥陀仏

体は渡世の道具箱

この口ひまだよ南無阿弥陀仏

雨降る朝や風の夜

降れや吹け々々南無阿弥陀仏

この声聞く身のたのもしき

闇夜の燈火また月か

かわいたのどをうるおおす

甘露の水かはた糧か

命と命の道一つ

仏の心を心とし

共にたたえん法の友

共にあおがん南無阿弥陀仏

(この度つとめずふる里に) というのは、仏の教えを求めて聞くつとめをしなかつたら、私たちが流転し続けてきたこの迷いの世界に、ということ、いつまでも苦界にとどまってしまう、とのこと。(人と生まれた尊さ)とは、迷いを離れるべく人に生まれたという、人としての

存在の尊い意義のことです。

釈尊の教えはどれも生死の迷いを離れる道としてさまざまに説かれているけれども、あわれにも末法に生まれた私たちは、穢しい修行についていけないような資質が備わっておらず、さまざまな仏の教えは一つも身につかない。仏の教えばかりではない、いろいろな美しき教訓や修道や道徳が身に付くかという、何一つ真に身に付かない。ただ身を守るためやお互いの利害を調整するためや虚飾の道徳があるばかりで、利己主義と自我主張の本質は変わらない。まことに悲しむべき存在である。

しかるに、こうした私たちのあわれな姿をすでに知り抜かれ、どこどこまでも一人ももれなく生死の迷いを離れて仏の覚りを完成させたい、救いたいと立ち上がられ、願を發し修行されたのが阿弥陀仏(如来法蔵様)であり、その救いの法門を念仏往生という。

こうして私たちがたやすく浄土に生まれる因として如来法蔵様は念仏往生の法を成就され、そして南無阿弥陀仏にまでなられた。この如来法蔵様の願心をへやむにやまれぬ強縁と仰せ下さる。私をどこまでも助けずにはおかない、捨ててはおけない、何としてでも救いたいというやむにやまれぬ大悲の願心で出来上がった南無阿弥陀仏。

この南無阿弥陀仏を私たちに与えて下さる。その南無阿弥陀仏が(我が魂)を、我が業魂を、我が煩惱魂を、抱きとって、南無阿弥陀仏と我が口に自身を露わにしたもう。ナムアマミダブツというお念仏の声に、阿弥陀仏ご自身の姿を現し、阿弥陀仏ご自身を名のりたもう、(汝を助ける親がここにいるよ)と。

お念仏にまでなつてくださる阿弥陀仏の浄らかな大悲の御手によって私の業魂が逆に照らし出される。私の濁悪の心は私では知ることはできない。清浄な大悲の心に照らし出されて、やっとな濁悪の業魂が見え始めるのである。

(求められたる目無鳥)とは、まあまあよく仰せ下さった。私は目無鳥。私は何ものであり、どこから来て、何処へいくのか何も分からないし、また真実の幸せが何であり、どの道をどのように歩めばよいか、何一つ確かなことは分からない。ただうろろとし呆然として立ちすくんでいる目無鳥のようなもの。しかるに、こんな私を如来法蔵様の方から探し求めて下さり、抱いてかかえて南無阿弥陀仏と口にわき上がった下さる。

私が仏を求めたのではない。私には求める力も智慧もない。しかるに阿弥陀様の方から私を求め、この世のチリのような私を一人子のように探し求めて抱いて下さったのである。

(命と命の道一つ 仏の心を心とし)とはどういう意味であろうか。無難に受けとれば、あなたのいのちも私のいのちも、帰する道はただ一つ、仏のまこと心を私たちの心にいたたく道である、と理解できよう。それゆえ、共に讃えん、共にあおがんとおっしゃるのである。